

(5) 大川筋中学校

学 校 長 山 沖 美 保
校内研究代表者 谷 崎 美 佳

1. 研究主題 「基礎基本を定着させ、思考を深める授業づくり ～表現できる生徒の育成～」

2. 主題設定の理由

本校は四万十川本流のすぐそばに位置し、自然に恵まれた環境にある。生徒数7名（2年生2名、3年生5名）の極小規模校だが、生徒たちは明るく活発に生活している。大川筋地区は学校と地域の関わりが深く、互いに協力し合い、地域行事や学校行事を行ってきた。

昨年度、「郷土を愛し、確かな学力を身に付け、生きる力を育む生徒の育成」という学校教育目標の達成を目指し、校内研究では「思考を深める授業づくり」に重点を置いて取り組んだ。そのことが授業改善に繋がったので、今年度も昨年と同様の学校教育目標、研究主題を掲げ、さらなる授業改善を目指すこととした。

3. 研究の進め方と方法

- (1) 基礎学力の定着を図る取り組み
- (2) 教科間連携による思考を深める授業づくりの探求
- (3) ふるさと教育をベースとした取り組み

	進め方	方法
1	学力調査の分析や(2)で行う授業研究から見えたことをもとに課題を焦点化し、全体または各教科での取り組み内容を決める。	ミニ校内研 帯タイム、宿題等
2	各教員の授業を、視点を揃えて参観し、思考を深める授業づくりにつながる課題設定や手立てについて話し合う。	チーム会、公開授業、指導案検討、模擬授業、研究授業、協議
3	地域の良さや課題を取り上げることを通し、ふるさととの未来について考える取り組みを総合的な学習の時間を核とした教科横断的な学習の中で行う。	ふるさと学習 人権学習 キャリア学習

4. 具体的取組

(1) 基礎学力の定着を図る取り組み

今年度をスタートするにあたり、前年度末に確認した生徒の学力課題を全員で共有し、年度当初から適切な支援を行えるよう準備を整えた。基礎基本をどう定着させるか、学習内容を「単元の学習が終わっても活用できる知識」として残すにはどうすればよいか、というのが以前から繰り返し出される課題であった。

そこで、基礎基本の定着に有効な方法を各教科で考え、実践し、チーム会などで共有することを繰り返すことにした。

昨年から出されていた課題である数学の基礎（計算等）の力を付けるため、4月から7月まで数学

1年間の流れ

- | | |
|-----|---|
| 4月 | 全国学力・学習状況調査、標準学力調査から既習事項の定着状況を知る、帯タイム(数学)スタート |
| 5月 | チーム会・ミニ校内研スタート
(強み・弱みの分析→課題の焦点化) |
| 8月 | 学期総括(検証→見直し) |
| 9月 | 弱みの克服を意識した取り組み(各教科)の開始 |
| 12月 | 学期総括(検証・見直し)、
高知県学力定着状況調査の分析 |
| 1月 | 弱みの克服を意識した取り組み(各教科)の開始
帯タイム(国・数・英)スタート |
| 3月 | 年度総括(検証・次年度に向けて) |

の帯タイムを行った。結果、2年生は計算の正確性が向上した。このことから繰り返し同じ形式の問題を解かせることが有効と考え、各教科の宿題に反映させた。また、各種学力調査の結果分析から、調査前に細かな復習を行った教科と行っていない教科では、知識・理解の観点に差が表れることも分かり、学習内容を忘れる頃に復習を繰り返すことを各教科で試すことにした。さらに、基礎の反復の機会を増やすため、3学期は国・数・英の帯タイムに取り組むことにした。

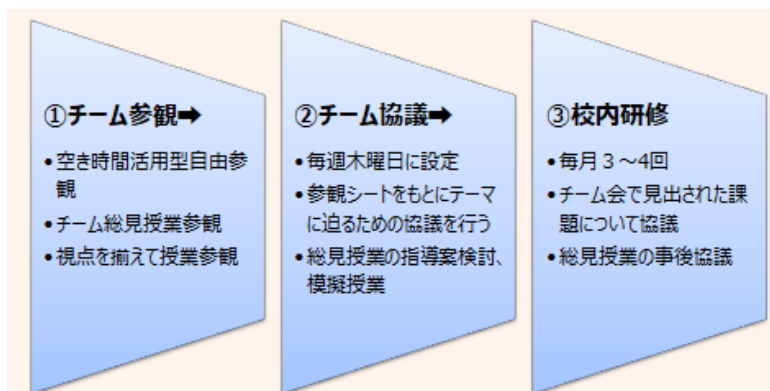
(2) 教科間連携による思考を深める授業づくりの探求

教科間での学び合いの機会としてチーム会を行うことを昨年度より開始した。今年度は昨年度の取り組みを活かし、右の形で行った。

研究主題に掲げた「思考を深める」とは、「ふるさと教育につながる教科横断的な思考力を育む」ことであると定義し、教科の枠を超えて考える力を育成するため、それぞれの授業を参観し、授業づくりのヒントを探していった。

授業を見合い、アドバイスをし合うことで、おおかわすじスタンダードに基づいた授業づくりや新学習指導要領の趣旨に基づいた授業づくりを各教員が目指すようになったと感じる。教員が「より生徒が思考する発問とは」「対話的な授業になる展開とは」という視点で授業を見るようになったことで、授業の質が変わってきたのではないだろうか。

本校で5教科を担当する教員は3人おり、それぞれが年間で5回以上の公開授業を行った。1、2学期の間、①授業者が設定した公開日に空き時間の教員が見に行く形(指導案なし、参観シート記入)、②全員参観の研究授業(指導案検討、模擬授業、研究授業、事後研究、全校研用のシート記入)の2パターンでの公開授業を行った結果、②の形の方が、授業者参観者ともに授業改善に繋がったとの実感を得る声が多かったことから、3学期は②の形のみで進めることにした。取り組み後、成果と課題を検証し、来年度に繋げたい。



おおかわすじ中スタンダード

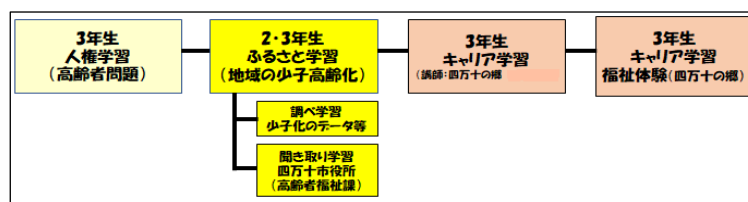
- 大きく掲げためあてに向かい
- 覚えている知識・技能をフル活用
- 考えを書いたり、説明したり
- わかるまで聞き合い、話し合い
- すっきりと納得できるまとめができ
- 実践できる、生かせる力となる授業

(3) ふるさと教育をベースとした取り組み

四万十市一校一役教育研究として「ふるさと教育」に取り組む始めて今年で3年になる。これまで、学校新聞づくりや地域の方を講師に招いての講話、開かれた学校づくり発表会や「ふるさと発見！四万十市こども研究発表会」でのプレゼンテーションなど、様々な地域と関連させた取り組みを行ってきた。

3年目となる今年は、これまでの取り組みから見えた3つの課題【①個々の取り組みの関連付けが弱い、②ふるさとや自分への自信を持ってない、③取り組みの発信が弱い】を克服することを目指し、取り組み内容の見直しを図った。

1学期はふるさと学習・人権学習・キャリア学習を関連させた取り組みを行った。人権学習で「高齢者問題」について学び、四万十市や高知県の福祉



対策への関心を高め、聞き取り調査等の調べ学習へ繋がった。四万十市や高知県の現状について知った後に福祉体験を行うことで、体験学習だけでは得られない深まりがあったと感じる。

2学期には学校新聞づくりに向けての取り組みを開始した。

昨年度と比較して

大川筋地区が好きか **60%→100%**

大川筋地区にいいところがあるか **60%→100%**

ふるさと教育の取り組みは好きか **90%→81%**

ふるさと教育は必要か **80%→100%**

生徒たちは小学校の時から新聞づくりに取り組んでおり、自信がある反面、苦手意識も持っていた。そこで今年は、編集会議を開き、編集長を決め、単元ゴールを「四万十市内の中学校に新聞を配布し、大川筋の魅力や良さを伝えること」と設定し、全員で1つの新聞を作っていた。インタビューや記事の作成を協力して行う中で生徒同士の仲が深まり、さらに生徒同士が認め合える環境になったことが自己肯定感の高まりにも繋がった。ふるさと教育に関するアンケートでは、「大川筋地区が好きか」などの項目で肯定意見が100%になった。地域のありのままを認め、それでも好きだと言える生徒が増えてきたと思う。また、新聞配布後、手紙を送ってくださった学校もあり、発信して終わりとならず次の取り組みへと繋げることができたことも成果であった。

3学期は教科との関連も意識し、2年生の国語の授業で「来年度のふるさと教育で取り組みたいこと」のプレゼンテーションを行った。学校ホームページの活用やパンフレット作成などが提案され、全校生徒・教職員の意見交換に繋がった。生徒の思いも生かし、来年度の取り組みを組み立てたい。

5. 今年度の成果と課題

(1) 学力調査等の結果から

高知県学力定着状況調査の結果から、全体的に上昇傾向にあり、全国平均よりも高い教科が増えていた(昨年度2教科→今年度3教科)ことから、授業改善の取り組みが成果となって表れ始めたのではないかと考える。また、記述式問題に着目すると、高知県学力定着状況調査では4教科で全国平均を超えることができ、全国学力学習状況調査でも年々数値が上昇している傾向が見えた。思考を深める授業づくりに取り組むことで「考えの形成」を大切にしたい授業へと変化していったことや、新聞づくりなど表現を磨く場があったことが書く力に繋がっているのではないと思う。

しかし、計算や漢字など知識・理解の定着が弱いことなどの課題もある。基礎的な問題の復習量を増やすため帯タイムの見直しを図り、現在、国・数・英の復習に取り組んでいる。

(2) アンケート結果から

生徒を対象に行ったふるさとアンケートでは、「大川筋地区が好きか」(60%→100%)、「大川筋地区にいいところがあるか」(60%→100%)、「ふるさと教育は必要か」(80%→100%)の3つの項目で肯定的な回答が100%になった。年度当初は自信のない発言が目立っていたが、現在ではふるさとへの良さを認める発言が増えているように思う。道徳アンケート「自分にはよいところがあると思う」の項目でも上昇が見られ、肯定的な回答が80%を超えた。

教職員を対象に行った思考力・表現力に関するアンケートでは、「思考を深める授業づくりによって、生徒の思考力が向上している」と感じる教員が100%であり、全員で同じ方向に向かって1年間取り組めたことが何よりの成果と感じる。